

同一性と差異性のパラドックス  
—メルロ＝ポンティの『可逆性』の解釈をめぐる—

**Paradox of Identity and Difference — on Some Possibilities  
of Interpretation of “Reversibility” in Merleau-Ponty—**

細見 和志

Kazushi Hosomi

Merleau-Ponty's notion of “Reversibility” has two possibilities of interpretation. On the one hand, according to M.C.Dillon, it is interpreted to be a system of difference or divergence that is never closed. On the other hand, C.Lefort insists that it should be understood as that of identity or sameness that excludes the fundamental element of difference. These two interpretations show that what Merleau-Ponty elaborates by “Reversibility” is a paradoxical structure of a reversible relation of subject and the World.

キーワード：メルロ＝ポンティの後期思想、可逆性、身体、同一性、差異性、他性

**Key words** : the late philosophy of Merleau-Ponty, reversibility, body, identity, difference, alterity

はじめに

晩年のメルロ＝ポンティの思索の中心概念である「可逆性」(réversibilité)をめぐる、二つの相反する解釈がある。ひとつは、「可逆性」を同一性の円環関係において捉えようとする解釈であり、もうひとつは、それを差異性を本質的契機とする閉じることなき解放系とみなす解釈である。前者の解釈を提示するルフォールは、ふたつの項の間の可逆的關係を意味する「肉」(chair)の概念に、第三項としての他者、あるいは他性への通路が欠けていることを強調している。それに対して、後者の解釈を支持するディロンは、「肉」における裂開、分裂といった差異性の契機を重視し、そこに他性への手掛かりを求めている。「可逆性」に関するこうした解釈の相違は何を意味するのであろうか。この

ような解釈のずれは、同一性か差異性かといった二者択一的な裁断によっては規定できない、事象の逆説性に基づくのではないだろうか。

この小論では、ルフォールとディロンの解釈を比較検討することによって、「可逆性」としての「肉」の両義性が示唆するメルロ＝ポンティの存在論の逆説的構造について考えてみたい。

(1)「可逆性」としての「肉」

晩年のメルロ＝ポンティが用いる一連の概念は、詩的喚起力に満ちており、彼が言い当てようとしている事象の性格を巧みに表現している。例えば、「肉(chair)」、「野生の存在(êtres sauvages)」、「可逆性(反転可能性)(réversibilité)」、「蝶番

(chamière)」、「侵食(empiètement)」、「絡み合い(entrelacs)」、「交叉配列(chiasme)」、「巻き付き(enroulement)」などのように、可塑的で撓みやすく、確固とした自己同一性をもたない関係構造を暗示する言葉が多い。その理由は、彼が、伝統的なヨーロッパの思考の枠組となっていた主観／客観、精神／物質、対自／即自の二分法によってはうまく捉えられない事象を主題化しようとしていたからである。

こうした新しい概念によって彼が捉えようとしていたのは、実定的で自己同一的な個々の「見えるもの」の総体としての世界ではなく、むしろそうした個々の「見えるもの」が、実は自ら身を隠すことによって「見えるもの」を現出させている「見えないもの」によって支えられているという逆説的事態であった。彼が、新たな存在論を「間接的存在論」と呼んだのも、存在者としての「見えるもの」を直接的に主題化せず、個別的な「見えるもの」と、それを「図」として浮かび上がらせている背景的「地」としての「見えないもの」との非実定的な差異構造に着目しているからである。

このような関係構造を顕在化するにあたって、彼はやはりわれわれの身体性の次元に問いかける。問いの向かう方向が常に身体的経験にあるという点では、彼の思想に前期と後期との区別はないといえる。しかし、後期の思想に起こった転換を理解するためには、彼の身体の捉え方に見られる微妙な差異に眼を向けなければならない。

『知覚の現象学』に代表される彼の前期の関心は、身体を主体の世界構成機能の内へ取り戻すことであった。科学主義的存在論においては、身体は客観・物質・即自の対象領域に配置されるのが普通である。しかしながら、わたしにとっての「わたしの身体」は、一方でわたしの意識の対象でありながら、どこまでもその対象という在り方に還元しつくせない側面をもっている。すなわち、身体は、われわれが世界を経験するときに、いつでも

すでに世界経験の可能性の条件として機能しており、世界構成機能の一部として主観性の領域にくだりこんでいるのである。

しかも、身体の働きは、けっして〈わたし〉という人称性の領域に回収してしまうことのできないある「匿名性」の次元において生起している。メルロ＝ポンティの前期の代表作、『知覚の現象学』は、顕在的意識の働きとしての「作用志向性」に先立って機能している身体を主題化する試みであった。こうした「匿名性」の次元において、われわれの反省的自覚に先立ってすでに機能している超越論的身体は、われわれの顕在的意識の眼差しから常に身を隠している。世界の現出の条件としての身体は、いわば現象の地平から姿を隠すことによって、逆に世界の現出を可能にしている。この意味で、われわれの身体は、視覚や触覚の対象となる「見える身体」の背後に、「見えない身体」と呼ぶべきもうひとつの身体の次元を備えているといえる。

前期の立場が、どちらかといえば、世界経験的生における身体の超越論的機能、すなわち「見えないもの」としての身体に目を向けた現象学的身体論であったとすると、後期の立場はどのような特徴をもっているのだろうか。まず第一に言えるのは、「見えるもの」としての身体、われわれの身の回りにある事物と同じ存在性格をもった身体、言い換えれば、物的世界へ内属した身体の在り方が強調されるようになったことだろう。「見えるもの」としての身体、そしてそうした身体として存在する主体は、世界を外側から客観的に眺めることはできない。身体的自己は、その本質において自分が眺める物の世界の一部であり、そのただなかから世界へと働きかけるのである。

後期の著作である『眼と精神』において彼はつぎのように述べている。

「見えるものであり、動かされるものである私の身体は、物のひとつに数え入れられ、一つの物で

## K. Hosomi, Paradox of Identity and Difference

ある。私の身体は世界の織目のなかに取り込まれており、その凝集力は物のそれなのだ。しかし私の身体は自分で見たり動いたりするのだから、じぶんのまわりに物を集めるのだが、それらの物はいわば身体そのものの付属品か延長であって、その肉のうちに象嵌され、言葉のまったき意味での身体の一部をなしている。したがって、世界は、ほかならぬ身体という生地で仕立てられていることになるのだ。』(OE.,19/259)

身体は触れられるもの、見えるものである限りにおいて、物と同じ資格で世界の中にあり、世界に内属している。このことはしかし、身体を物理・化学的な即自存在に還元することではない。むしろ、身体の世界への内属性は、物の世界を客観主義的存在論から解放する。なぜなら、主観を内に含んだ客観はもはや文字通りの客観ではないからである。身体が属している物の世界は、「見る者がその部分をなしているのだから、決して即自的なものとか物質とかではない」。(OE.,18/258)世界は、それを見る者を離れてはありえず、世界を見る身体という反省的な眼差しを内臓しているために、純然たる思考の対象ではなくなる。したがって、身体の世界への内属は、客観的世界という幻想を内部から揺り動かすことになるのである。

第二に、メルロ＝ポンティが注目するのは、物の世界に属するこの同じ「見えるもの」としての身体が、他方では触れるものであり、「見るもの」、すなわち「見えないもの」でもあるという、自己の身体経験における両義性である。このことは、同じように、主体であり対象でもある、あるいは意識でもあり物でもあるという自己の身体の両義的な、存在仕方を主題化した前期の『知覚の現象学』の身体概念の延長上にあるといえる。しかし、やはりここでも微妙な差異がある。前期においては、世界へと向かい、世界へ身を挺した身体の自己投企の働きに目が向けられていたのに対して、後期のメルロ＝ポンティは、同じひとつの身体に

おける能動性と受動性との共存関係、あるいはもっと正確に言うと両者の相互転換という事態に注目するようになる。物を探索し、物に触れている私の右手は、その限りでは能動的主体の地位にある。しかし、左手によって触れられることによって、右手は一転して対象的存在へと転換してしまう。一つの身体において生起する、こうした「触れるもの」と「触れられるもの」、  
「見るもの」と「見えるもの」、能動性と受動性といった互いに相反する契機の相互転換という逆説的事態を主題化し、それを軸として知覚的世界の存在論を展開することが、後期メルロ＝ポンティの新たな課題となった。このような後期特有の彼の思考を示すテクストを引用してみよう。

「私の運動と私が触れるものとの間には、或る原理的な関係、或る血縁性があり、そのおかげで、それらが単にアミーバの偽足のような、身体的空間の漠然とした束の間の変形ではなく、触れうる世界への加入・開在性となるのでなければならない。そして、このようなことが起こりうるのも、私の手が内側から感じられるものであると同時に、外から近づきうるもの、例えば私のもう一方の手で触れうるものであり、私の手が、それによって触れられている物の間に位置し、或る意味ではそれらの一つであり、要するにそれがその部分をなしている触れられうる存在に開かれているからにはほかならない。私の手における触れるものと触れられるものとのこの交叉によって、手自身の運動が、その問いかけている宇宙と合体し、宇宙と同じ地図に記載されることになるのだ。手の運動と宇宙というこの二つの系は、オレンジの両半分のように、互いに重なり合うのである。」(V.I.,176/185)

ここにあるのは、世界を固定した視点から眺める主体、確固たる自己同一性の固い殻に守られ、つねに世界に眼差しを向ける側に身を置く主体ではない。まるで視点を置く場所によって図と地

(壺・花瓶と向い合う二つの顔)とが反転する「ルビンの壺」のように、触れる身体と触れられる身体、見る身体と見られる身体とが入れ替わり、どちらか一方を絶対化したり中心化したりすることはできない。身体において起こる、こうした主—客の逆転、あるいは相互反転という事態のことを、メルロ＝ポンティは「可逆性(転換可能性)」(réversibilité)と呼ぶ。何物かに触れている身体、何物かを見ている身体は、つねにその「裏面」としては、触れられるもの、見られるものとしての身体でもある。この触れられ、見られる身体は、それ自身で完結しているのではなく、物の世界に開かれており、そこに属している。ここでは、見るものと見られるものとの実定的な区別は存在しない。身体的自己そのものが自己との関係において可逆的であるように、この身体的自己と世界との間にも一種の可逆的關係が成り立つことになる。わたしが物を見るのは、その見られる世界に内属したこのわたしの身体においてであり、見られるものが同時に見るものとなる。このような可逆的關係構造のことをメルロ＝ポンティは「肉」(chair)と呼んでいる。

彼が「肉」と名づける事態は、身体的経験をモデルとした、主体と客体とが相互に反転し、交叉するような可逆的關係構造のことである。可逆性は、ひとつの身体においてのみ生起するのではない。それは私と他者、私と世界との間にも成立していると、メルロ＝ポンティは言う。例えば、画家の経験を語ったつぎのような「眼と精神」の一節。

「〈画家〉と〈見えるもの〉との間で、不可避的に役割が顛倒する。その故にこそ、多くの画家は物が彼らを見守っているなどと言ったのだし、クレールに次いでアンドレ・マルシャンも次のように言うのだ。『森のなかで、私は幾度も私が森を見ているのではないと感じた。樹が私を見つめ、私に語りかけているように感じた日もある。』」(O.E.,31/266)

あるいは、他人との握手について述べた箇所。「握手もまた転換可能であって、私は触れていると同時に自分も触れられていることを感ずることができるのだ。」(V.I.,187/197)このような可逆的關係においては、もはや中心と周縁、構成するものと構成されるものとの明確な区別は意味をもたない。主体的自己は脱—中心化され、世界もそれに伴って、脱—世界的主観によって俯瞰的視点から安定したパースペクティブにおいて捉えられた平面的世界から、奥行きと厚みを持ち、「見えるもの」と「見えないもの」との非実定的な差異化の運動によって現出する「垂直の世界」となる。

ただ、メルロ＝ポンティが用いる「肉」という言葉は、ある種の質料的あるいは実体的イメージを喚起してしまうために、このような関係構造を表現するためには不適切であるかもしれない。それはあたかも物質的なものであるかのような印象をあたえる。しかし「肉」という概念は、主体と客体とが固定されることなく、いつでも相互に入れ替わるような関係、主体と客体とが互いに侵食し合い、安定した自己同一性を持ち得ないような関係概念である。彼が、「肉」について述べた文章を引用してみよう。

「肉は物質ではないし、精神でもなく、実体でもない。それを名づけるためには、水・空気・土・火について語るために使用されていた意味での、言い換えれば空間・時間的個体と観念との中間にある一般的な物、つまりは存在がひとかけらでもある所ではどこにでも存在の或るスタイルを導入する一種の受肉した原理という意味での『エレメント』という古い用語が必要になろう。肉は、その意味では、〈存在〉の『エレメント』なのだ。」(V.I.,184/194)

「われわれの語っている肉は、物質ではない。それは、見えるものの見る身体への、触れるものの触れる身体への巻きつきなのであり、そうした巻きつきが証拠立てられるのは、特に、身体が物を見つつある自分を見、物に触れつつある自分に触

れ、その結果、身体が、触れられるものとしては物の間に降りていくが、それと同時に触れるものとしてはすべての物を支配し、おのれの塊の裂開ないし分裂によって、おのれ自身から両者のこの関係を、さらにはこの二重の関係を引き出すときである。』(V.I.,191/202)

ところで、この概念には、ある曖昧さが付きまわっている。つまり、メルロ＝ポンティがこの概念によって、主－客構造のどちらの側にも視点を置くことのない、非実定的で主体の同一性の閉域に回帰しない存在論を構想していたことは確かであるが、最終的には、やはり肉という同一性に立ち戻ってしまうことになったのか、あるいは、肉はどこまでも閉じることのない解放系なのか、という問題である。彼が「肉」を、「存在のエレメント」として規定するときには、「肉」はあたかもすべての存在者が回帰してゆく究極の地盤、あるいは母胎であるかに見える。可逆性といっても、同一性における自己関係構造であるのなら、そこには他者や他性が排除されてしまうことになる。反対に彼が、肉における裂開や分裂について語る時、あるいは、彼の次のような言葉を見る時、すなわち、「原初的なものは炸裂するのであって、哲学は、この炸裂、この不一致、この差異化につき添うべきなのである」(V.I.,165/172)、われわれは「肉」における差異性の契機を無視することはできない。こうした炸裂(*éclatement*)、不一致(*non-coincidence*)、差異化(*différenciation*)が、どのような他性(*alérité*)の可能性を開示しているのかという問題は、メルロ＝ポンティの後期思想を考える上で重要な意味をもっている。

こうした可逆性としての肉に関わるこうした問題について、C・ルフォールとM・C・ディロンとの解釈を手掛かりとして、以下において検討してみたい。

## (2) 同一性としての肉

### —ルフォールの解釈について—

まず最初に、メルロ＝ポンティの「肉」を、〈見るもの〉と〈見られるもの〉、〈触れるもの〉と〈触れられるもの〉との間の相称的(*symmetrical*)な関係として捉え、それを同一性の円環構造として解釈するクロード・ルフォールの議論をとり上げよう。メルロ＝ポンティにおける「他性」(*alterity*)の問題を主題とした研究論文集『メルロ＝ポンティにおける存在論と他性』で、ルフォールは「肉と他者性」と題する論文を寄せている。そのなかで彼は、メルロ＝ポンティの肉の概念は二項関係でしかなく、そこには、第三項としての他者あるいは他者性が考慮されていない、と指摘している。

ルフォールの解釈の要点は次の二点に集約できるであろう。第一は、肉のモデルになっているイメージが発生(*genesis*)であること。可逆的關係が、同一の肉における折り曲がり、分裂による見る者と見えるもの、主体と客体という二項関係の発生に依拠しているとすれば、他性は肉の同一性に還元されてしまう。第二は、メルロ＝ポンティのいう可逆性モデルによっては、幼児と成人の間にある非対称的な関係を理解することができないこと。肉は、幼児と成人と関係に含まれる他性の契機を捉えられない。この問題は、「肉の存在論」の限界に関わる議論である。さらにルフォールは、肉における他性の欠如とメルロ＝ポンティの政治思想の問題との連関に言及しているが、ここではとり上げない。

さて、まず第一の論点から見ていくことにしよう。ルフォールは、「肉」における他者性、もしくは他性の不在を、「肉」が自己一発生イメージによって捉えられていることの中に見出している。ルフォールは、メルロ＝ポンティのいくつかのテキストから、「肉」のイメージを次のようにまとめている。「出現、それ自身からそれ自身への到

来、巻きつき、反転、同質性、類似性、折り曲がり、内部から外部への隔たり：こうしたイメージの各々が、「肉」というものの光景を明らかにしてくれよう。そうして、このような光景は、発生(genesis)のそれに通じている。』(F.O.,5)「肉を考えるためには、われわれは自己一発生であるような発生、もっと正確に言えば、自己一出生(self-begging)の運動のようなものを考えなければならない。疑いなく、これは出生(birth)のイメージである。』(F.O.,5)

確かに、メルロ＝ポンティの記述のなかには、肉を表現する具体的イメージとして、発生、出生に関わる箇所が少なくない。例えば、肉＝自然＝母性・母体というイメージの連関をうかがわせる有名な一節、「自然は生まれたばかりだ。(中略)〈自然〉の精神分析を行うこと：〈自然〉こそ肉であり母なのである。』(V.I.,320-321/394-395)あるいは存在のエレメントとしての肉における視覚の誕生に触れた箇所、「その流れが、胎児を新生児に、見えるものを見る者にし、そして身体を精神に、あるいは少なくとも肉にする(中略)。いずれにしても、われわれのあらゆる実体主義的な考え方に反して、見る者は胚の発達の副主題のうちにあらかじめ計画されているのであって、見える身体が、おのれ自身への或る働きかけによって、そこに視覚が生ずるはずのくほみをしつらえ、長い成熟を始動させるのである。その成熟の果てに、見える身体が突然見るようになる、言いかえれば、自分自身にとって見えるようになるのであり、そして見える身体は見る者と見えるものの果てしない引き合い、倦むことなき変身を設立し、最初の視覚とともに、その変身の原理が立てられ、そして軌道に乗せられることになるのである。われわれが肉と呼んでいるもの、内側から加工されたこの塊は、いかなる哲学でも名前を与えられてはいない。』(V.I.,193/204)

ここで、メルロ＝ポンティは身体における視覚

の出現を、身体のそれ自身への折り返しとして捉えている。「すべての視覚には根本的なナルシシムがある」(V.I.,183/193)と語るメルロ＝ポンティ。ルフォールは、可逆性を自己一発生、母体としての肉、視覚のナルシシムとして捉えるメルロ＝ポンティの「肉の存在論」に、他性の不在を見て取る。肉は可逆的關係の名前であり、見るものと見えるもの、触れるものと触れられるものとが相互に反転し、入れ替わることである。主体と客体、能動性と受動性というそれぞれことなる契機は身体というひとつの同じ肉において相互に反転し合う。可逆的關係は、このような二項が結局は同一の肉における出来事であるにすぎない。可逆性は、一つの身体において生起するだけでなく、自己と世界とのあいだにも、見るものと見られるものとの間においても成り立っている。メルロ＝ポンティは言う。「つまり存在へのすべての関係は、捉えることであると同時に捉えられることであり、捉える働きが捉えられ、書き込まれる、それもおのれが捉えるその同じ存在に書き込まれるのである。』(V.I.,319/392)こうして、メルロ＝ポンティにおいて、可逆性を構成する二つの契機は、存在のエレメントとしての肉という同一性に回収されてしまう、とルフォールは主張する。ベルが指摘しているように、ルフォールの解釈によれば、「メルロ＝ポンティの超越論的企図は肉の同一性が他者性や差異の条件であることを明らかにしている。他者はただ単に肉の自己一発生の延長であるにすぎない。要するに、他者は自己の延長である。』(P.D.,170)したがって、メルロ＝ポンティもフッサールと同様に、「他者を他なるもの(Other)、差異、超越として説明することができない」のである。(P.D.,170)

第二の論点は、幼児の経験と成人の経験との関係を肉の相称的(symmetrical)関係と同一視できるのか、という問題である。ルフォールは、幼児の経験と成人の経験との間には、根本的な非対称関

係 (the original asymmetry) が見られると言う。赤ん坊にとって、成人に見られるような明確な自—他、および内部と外部の区別はまだ存在しない。世界はいまだ分節化されてはおらず、未分化のままである。幼児に世界を開くのは他者の眼差しである。「幼児の眼と物との間には媒介者がいて、他者であるこの媒介者は、幼児と同じレベルに立っているわけではない。それは、上の方から、見られるべきものを与えてくれるのである。」(F.O.,9) この媒介者は、事物には特定の名前があることを幼児に教える。それによって、幼児は「法の領域」に参入し、「事物が外界において固有性を持っていること」(F.O.,11) を理解できるのである。

さらに、幼児は自分の名前との関係において他者の媒介を必要としている。名前は与えられる。「命名されることは、(中略)最初の還元しえない超越の証拠である。確かに、われわれは自分の名前を変えることができる。しかし、名づけられてしまったこと、世襲的なものの印、負債と法の印を身に引き受けていることから逃れることはできない。こういうわけで、自己の名前との関係は、自己の身体との関係とはまた違った種類のものである。(中略)私の名前と私自身との間の隔たり (divergence) は、見るものとしての私と見えるものとしての私との間の隔たりとは一致しない。名前というのは、私の上に刻印され、同時に私の外に、私よりも高いところに止まらざるをえない。」(F.O.,11) 幼児が、名前、価値、法をもった世界へと開かれていくためには、言い換えれば、幼児の経験において内部と外部、自己と世界という二項関係が可能になるためには、第三項としての他者という媒介者の介入がなければならないのである。ルフォールは、こうした幼児の経験に関わる媒介者としての他者、肉の同一性に基づく可逆性のなかには回収できないと言う。

だが、ルフォールの言うように、メルロ＝ポンティの可逆性としての肉には、他性の契機が欠けて

いるのであろうか。見る者と見えるもの、触れるものと触れられるものとは、可逆性において、肉の同一性に還元されてしまうのであろうか。次のメルロ＝ポンティの言葉は何を意味しているのであろうか。「転換可能性(可逆性)とは、触れるものと触れられるものとの現実的な同一性ではない…、それは(いつも失敗に終わっている)両者の原理的な同一性なのである。」(V.I.,325/403)「われわれは、初めは概略的に見る者と見えるもの、触れる者と触れられるものとの転換可能性という言い方をしておいた。今や、問題は、つねにさし迫っていながらも決して実際に実現されることのない転換可能性にあるのだ、ということを強調すべきときである。私の左手はつねに、物に触れつつある右手に触れそうになっているが、しかし私が合致に達することは決してない。」(V.I.,194/204-205)

つぎにわれわれは、可逆性における差異性のもつ意味を考えるために、ルフォールの問題提起に対して答えたディロンの主張をとりあげてみよう。

### (3) 差異性としての肉

#### —ディロンの解釈について—

【メルロ＝ポンティの存在論】という体系的な研究書の著者として知られているディロンは、『隔たり：クロード・ルフォールの「肉と他者性」への応答】と題する論文の冒頭で次のように述べている。「ルフォールは、『肉と他者性』という論文の中で、『肉の哲学』の境域のなかには『他者、第三者、他者性を代表するもの』を十分許容することはできない、と指摘している。私が主張したいのは、メルロ＝ポンティの肉の可逆性において示されている考えは、他性という超越を開示できる存在論を構想しているが、ただかれはその提示の仕方を誤ったのだ、ということである。」(R.,14)メルロ＝ポンティの可

逆性における他性とはどのようなものなのか。しばらく、ディオンの解釈を辿ってみよう。

ディオンは、ルフォールの解釈を次のように要約している。「ルフォールは、可逆性の関係を、(a)身体のそれ自身への関係、および(b)身体と外部との関係に限定している。ところで、肉としての身体は、外部の内部である。すなわち世界の肉は身体の内と同じ物である、それは内部の外部である。円環は肉の中で、肉のそれ自身への関係の中で、その自己同一性(selfsameness)の中で、閉じている。一つの肉が、その分裂、裂開、自己自身への折り返しの二元性を一体化しているのである。」(R.,15)

このようなルフォールの解釈に対して、ディオンは三つの点から批判している。第一点は、他者との関係における同一性と差異性の問題である。第二点は、世界の超越性に関する問題である。ここで、ディオンは、ルフォールの解釈において、身体が超越論的自我の対象構成機能と同一視されている、と指摘している。第三は、幼児経験における他性の契機に関わる問題である。以下、それぞれの論点を整理してみよう。

(1)そもそも他性というのは両義的である。すなわち、そこには差異性と同時に同一性が、あるいは内在性と同時に超越性が含まれていなければならない。差異性と超越性は、他者の不透明性を意味している。私は、他者の感情や思考を完全に理解し、体験することはできない。私と他者との間には、常にある隔たり、距離が横たわっており、私はそれを飛び越えて他者と合一・融合することは不可能である。しかし、差異性と超越性だけであるならば、私は他者といかなる交流・コミュニケーションを行うこともできないであろう。他者が私と同様の主体であり、なんらかの形で相互理解が可能であるとすれば、私と他者とはそうした相互理解を可能にする共通の地盤において存在していなければならない。メルロ＝ポン

ティが肉を存在のエレメントと呼ぶのは、この意味においてである。「他者の世界と私の世界とは、両義的に、同じであり違っている。」(R.,16)メルロ＝ポンティの肉の可逆性とは、こうした両義的な事態を意味しているのであって、ルフォールのように、同一性の契機だけを強調するのは、肉に含まれる差異性の契機を見失ってしまうことになる。

(2)他者性は主体にとっての対象という意味で理解してはならない。他者性を主体が投企し、付与する対象の意味として理解するならば、他者性に含まれる超越性が消し去られてしまう。見る者としての身体的自己と見られるものとしての世界とは可逆的關係にあると言われるのは、決して、世界の超越性を主体によって構成された意味に還元してしまうことではない。つまり、見えるものと見ることは等価ではないのであって、見えるものは見ることを越えて出ている。しかし両者の間には、差異性と超越性のみがあるのではなく、同時に見る者が見られるものへとその役割を転換する可逆性が成立するための肉における同一性がなければならない。ルフォールのように、同一性に優位を置き、事物や世界の差異性、超越性を構成された意味に還元してしまえば、他性は肉の自己同一性の中で失われてしまう。そうなれば、「可逆性は、肉という一枚岩の内部における内在的構造になってしまう。隔たり(分岐、分裂、裂開など)が肉がそれ自身においてそれ自身の内的な再帰性を、それが構成する世界に対象化することによって生み出す幻想に還元されてしまう。」(R.,18-19)

(3)幼児がもし、成人における内部と外部、自己と他者の区別を全く感じておらず、いわゆる主客未分の状態にあるのだとすると、いったいいかにして幼児は成人の世界、すなわち自一他との区別のある世界に参入することができるのであろうか。幼児が成人へと成長して行くためには、幼児と成人の間にはなんらかの連続性がなければならない。



## K. Hosomi, Paradox of Identity and Difference

それでは、デイロンの言う可逆性における他性とはどのようなものなのであろうか。彼は、次のようなメルロ＝ポンティのテキストを引用している。「私は、他人の声を聞くようには、自分の声を聞くことはできず、私にとっての私の声の音響的存在が、いわばうまく展開されないのだ。それはむしろ、わたしの声の構音的存在のこだまであり、それは外部というよりも、むしろ私の頭の中に響くのだ。私はつねに私の身体と同じ側において、私の身体は、私に、或る不変な視角のもとに与えられるのである。」(V.I.,194)ここからデイロンは、私と他者との分離の根源性を読み取っている。人間は身体的自己として存在しているかぎり、身体の局所性からは自由になることはできない。自己と他者とはその誕生以来分離されており、この隔たりの事実性は取り消しえない。自己と他者との間にはつねに、乗り越えられない不透明性、共約不可能性が存在しているのであり、両者がひとつに融合することはありえない。「他者の知覚的呈示というものがあるが、それは他者の不透明性、抵抗、結局のところ私には理解できない他者の存在の深み、すなわちその取り消し得ない超越性を内蔵しているのである。」(R.,23)

しかし、メルロ＝ポンティは他者の超越性によって、相互理解の絶対的不可能性を導くことはしない。彼の眼差しは常に現象の両義的相貌を見つめている。デイロンは言う。「世界の分化・差異化(differentiations)は知覚的世界の中で発生する原初的な分化・差異化である。それは、意識の構成物、文化、言語がそれに基づいているような分化・差異化を根拠づけている。ただ、こうした分化・差異化は可逆性の交換や越境が起こりうる共通の領野として機能している単一の世界の分化・差異化である。私は、今までは他者によって占められていた場所に身を置くことができるし、いい位置から世界を見ることができる。というのはわれわれは同じ世界に住んでいるからである。こう

した位置の可逆性のおかげで、われわれは共通の基盤に近づくことができるのだが、結局は、私は他者の身体を生きることができないので、他者の経験に近づくことができるだけである。」(R.,23-24)

ベルが指摘しているように、ルフォールが〈見る者〉と〈見られるもの〉との間の可逆的関係を対称的(symmetry)であると規定したのに対し、デイロンはそれを非対称的(asymmetry)だ、と捉えているところに両者の大きな違いがある。(P.D.,166)〈見る者〉と〈見られるもの〉とは決して等価ではないし、交換可能な同一物ではない。われわれは、自分が樹を見るのと同じ仕方でも樹によって見られるのではないのであって、それは「世界の肉は、私の肉とは違って、おのれを感じることはない」(V.I.,304/366)からである。

次の文章は、デイロンによって引用されているわけではないが、肉における差異性、あるいは隔たりの根源性を示唆しているように思われる。「それ[対自]は差異化における隔たりの極点なのである。一自己への現前は差異化された世界への現前なのである。一たとえば反射に含まれているような「視」を形成するものとしての知覚的隔たり、また差異化としての言語活動によって対自存在を仕上げるものとしての知覚的隔たり。意識すること＝地の上の図をもつこと—われわれはこれ以上遠くへまでは遡れない。」(V.I.,245/272)「この実存とは、言いかえれば、自己への不在であるような〈自己〉への現前、〈自己〉との隔たりによる〈自己〉との接触であり—地の上の〈図〉、もっとも単純な「Etwas[何ものか]」である。」(V.I.,246/274)

またベルは、メルロ＝ポンティが、差異そのものの、隔たりそのものを、二項関係を越えた第三項として理解していたことを示す一節として、次の文章を提示している。「図—地の区別は「主体」と「客体」のあいだに第三項を導き入れる。そこにあるこの隔たりこそが、なによりもまず知覚的意味なのである。」(V.I.,250/279)

こうした引用から推察できるのは、メルロ＝ポンティの言う差異化、隔たり、裂開といった一連の言葉によって示されている事態は、肉の規定において決して二次的で派生的なものではなく、肉の本質に深く関わっているということである。そして差異性に媒介されたメルロ＝ポンティの肉という概念は、ディロンの強調するように、どこまでも関係概念として理解しなければならない。しかし、「肉」という名辞は、こうした可逆的な関係構造を表現するのに適切な言葉であろうか。むしろ、それは伝統的な「実体」や「基体」を連想させてしまい、その非実定性が隠されてしまうのではないだろうか。ディロンは、差異性と同一性を併せ持った可逆性を表現するには、「肉」というのは不適切であり、メルロ＝ポンティの意図を見誤らせる結果になると指摘している。「可逆性は、実体的ではなく、副詞的に理解しなければならない。可逆性もろもろの現象における関係の『いかに』に関わるのであって、その『なに』に関わるのではない。」(R.,25)

### むすび

ルフォールとディロンとの解釈から、なにが明らかになるのであろうか。それは、メルロ＝ポンティにおける肉の可逆性は、同一性と差異性とのどちらかに還元できるものではなく、そのどちらをも本質的契機としている逆説的な関係構造であるということである。したがって、われわれはベルと共に、このように言うことができるであろう。「メルロ＝ポンティは同一性としての肉と差異性としての肉との両方を、対称的で非対称的なものとしての可逆性を強調しているのだと、見ることができるし、またそうすべきなのだ。というのは、肉がその両方であるからではなく、そうした区別ができるようにしている逆説的な条件だから

である。」(P.D.,167-168)

ベルが指摘しているように、メルロ＝ポンティがこうした逆説的な肉という概念を構想したのは、二つの大きな意図があるように思われる。「一方で、肉を単なる同一性に還元しないことによって、メルロ＝ポンティは、他者を他なるもの(違ったもの)として説明するという初期の困難な問題を回避する必要があったし。他方で、肉を絶対的な差異あるいは分裂に還元しないことによって、メルロ＝ポンティは、ディロンがまさしく指摘しているように、精神／身体の二元論を避けることができる。」(P.D.,167)すなわち、第一に、主体と世界とを同一的融合関係に還元することも拒否することによって、他者性への配慮、関係論的な立場、世界の非実定性とそのゲシュタルト的構造に基づく存在論を構築すること。第二に、人間と世界とを主観と客観との二項対立図式から解放し、物心二元論・科学主義的存在論を批判すること。以上のような意味で、ディロンの解釈は、「肉」の概念が内包する両義性に十分配慮しており、同一性と差異性の両方に含まれた含意に眼を配っているという点で、評価できよう。ただ、肉における他性の契機をめぐる問題は、他者の不透明性、他者の共約不可能性のみならず、主体としての「私」の自己同一性における他性の問題にもかかわっている。この問題については、稿をあらためて検討したい。

## 参考文献

Merleau-Ponty, M.

LeVisible et l'invisible. Gallimard. Paris. (略記号は V.I.)

(滝浦静男, 木田元訳『見えるものと見えないもの』  
みすず書房)

L'Œil et l'Esprit. Gallimard .Paris. (略記号は O.E.)

(滝浦静男, 木田元訳『眼と精神』みすず書房)  
(邦訳ページはスラッシュ (/) のあとに併記する)

Lefort, C.

Flesh and Otherness. (Ontology and Alterity in Merleau-Ponty, ed. Galen Johnson and Michael Smith. Northwestern University Press 1990) (略記号は F.O.)

Dillon, M.C.,

Écart: Reply to Lefort's "Flesh and Otherness" (Ontology and Alterity in Merleau-Ponty) (略記号は R.)

Bell, J.A.,

The Problem of Difference. University of Toronto Press 1998  
(略記号は P.D.)